

## 八十年越しの夢

東京大学大学院経済学研究科所蔵「古貨幣・古札画像データベース」の公開によせて

小島 浩之

東京大学大学院経済学研究科は多数の古貨幣、古札を所蔵している。この度平成 18 年度の科学研究費補助金（研究成果公開促進費）を得てその一部を画像データベースとして公開することができた。

古貨幣・古札 画像データベース【試行版】

<http://www.lib.e.u-tokyo.ac.jp/shiryō/kahei.html>

本コレクション受入の経緯やその学術的価値については別稿（以下拙稿）（<http://www.lib.e.u-tokyo.ac.jp/shiryō/bunken/kaidai.pdf>）にて論じているので、本稿ではデータベースとして公開するまでの歴史的経緯を中心に論じ、この度の公開の意義について述べようと思う。

古貨幣は実業家であった藤井榮三郎氏の旧蔵品であり、昭和 2 年に本研究科に寄贈された。拙稿で述べたように学究肌であった藤井氏はコレクションの学術的な利用を望んでいた。寄贈コレクションの原拓本『寶貨録』には「このコレクションの利用によって、未だ発表されていないような論文が書かれれば、大学当局は錢貨学の講座を置くこともあるだろう。」という趣旨の言葉まで述べている。これに対し寄贈時の担当者であった経済学部教授山崎覺次郎は「寄贈の趣旨に辜負しないやうに、十分コレクションを利用して研究に従事することが、我々の責務である。而して此利用は単に經濟の方面に限るものでなく、歴史、地理、技術等の研究にも貴重な資料を供することと思ふ。」（山崎 1928）と応えている。これについては日本銀行で永らく貨幣整理に携わった郡司勇夫も「山崎先生としては、大いに宣伝されて、大いに利用してもらいたいということをつねに考えておられた」（土屋ほか 1955）と述べている。ここからは山崎教授が寄贈者の意思に沿うよう心がけていたことが伺えるのである。また古札は安田財閥の二代目で書誌学にも造詣の深かった二代目安田善次郎の寄贈である。この寄贈も「経済学攻究資料」として後の日本銀行総裁である結城豊太郎の斡旋により成立したものであった。

このように寄贈者は学術的利用を望み、引き受けた山崎教授もそれに応えようとし、これらのコレクションについて順次整理が行われていったのである。

戦後になるとこれらのコレクションについて、寄贈当時の実情を知る方々を交えて座談会が開催された。この座談会の目的は「コレクションの保存および利用方法の改善をはか

る」ため、来歴や重要性をはっきりさせることにあった。この座談会は活字として記録に残され、これによって来歴や重要性が今日まで伝えられてきた。昭和30年代にあって情報を記録し保存しようとした発想そのもの自体素晴らしいことであり、敬意を表すべきことだろう。しかし公開や利用ということになると、問題点の指摘はあっても結論らしきものは出なかった。当時の実情からすれば、貴重であるということと実物を利用・公開させたいというジレンマを乗り越えることはできなかったのである。この座談会から大学紛争に至るまでの状況は石井寛治氏が次のようにまとめている。

だが、上記座談会でも指摘されているように、せっかく大事に保存されてきた古貨幣であるが、研究者による利用という点では、あまり寄贈者の期待にこたえたとはいえ難かった。それ故、『紛争』直後には、こういう厄介なお荷物を保管するのは考えものだという議論する出てきた（石井1981）

大学紛争時に本研究科は、某銀行に寄託することでこれを守り通したが、紛争終了後に戻ったコレクションは保管状況が悪く無惨な姿であったという。このように本研究科のコレクションは昭和30年代までに整理され公開方法の模索までたどり着いた。しかし当時の実情や大学紛争といった時代の煽りを受け、利用・公開への道は閉ざされてしまったのである。

昭和51年9月4日、毎日新聞は朝刊で「大判、小判、ミイラなど・・・『宝のもちぐされ』東大」として、本研究科のコレクションなどが公開されないままになっている現状を批判する記事を掲載した。同紙の川柳のコーナーには「東大に大判、小判の山。カネではない資料だ、というが、握ったら放さぬは、同じ。」と痛烈な皮肉のオマケまでついている。この記事が大学紛争以降、閉ざされていた利用・公開の問題を再び考える上での起爆剤となったかどうかは定かではない。しかし昭和54年から57年にかけて整理と詳細目録の作成が行われ、再度の利用・公開が模索されることになる。この時の整理には前述の郡司氏を招聘し4万点に及ぶ古貨幣・古札について、詳細な目録カードの作成と写真撮影が行われた。これによって研究者が閲覧するための基礎的な情報が整備されたのである。以後、平成10年までの間に保管設備の更新、図録および冊子目録の作成が行われた。しかし、展示スペースが設けられているわけでもなく、またセキュリティーの問題もあって、大々的な利用がなされた訳ではなかった。このため近年は再び「知る人ぞ知るコレクション」となり、学内でもその存在を知らない教職員が増えつつあった。

そこで学術的な利用を促すため考えられたのが、データベース化して画像公開することであった。実物そのものを一般公開する難しさは、現在も昭和30年代もそう大差ないだろう。これに対してインターネットによるバーチャルな公開は昭和30年代では考えられなかったことである。つまりこのデータベースは、前世紀にはなし得なかったコレクションの利用・公開が、今世紀に入り新たな活路を見出した好例だと位置づけることができるの

である。所蔵資料をデータベース化して Web 公開することは、現在では普通のことであり何ら目新しいことではない。近年では様々な工夫が凝らされたデータベースが数多く公開されている。それに比べれば本データベースは技術的にごくありふれたものである。それでもここに一文を草したのは、東京大学経済学部が八十年の歳月をかけて試行錯誤した末の成果であり、寄贈者や先人のたゆまぬ努力の結果として存在するものだと書き留めておく必要を感じたからである。

<引用文献>

石井 1981 石井寛治「経済学部所蔵古貨幣の目録について」(『経友』91,1981.9)

土屋ほか 1955 「経済学部所蔵古貨幣コレクションに関する座談会記録」(『経済学論集』23-2, 1955.2)

山崎 1928 山崎覺次郎「藤井榮三郎氏の寄贈された東洋錢貨のコレクションに就いて」(『経友』10,1928.1)